

目的：本研究では、子どもが異文化で新しい環境への適応を連続的に要求される過程で、自己の価値観の調整をどのように経験し、行動が変容していくのかという観点から事例に基づき考察していく。

方法：4歳から6歳までの幼児が在籍する公立幼稚園の幼児を対象として午前中の自由遊びから降園時間にかけての参与観察を行った。面接調査については保育者及び保護者を対象に行った。アメリカから日本に帰国したC児を取り巻く環境について検討し、仲間と馴染めなかった時期を経て、どのように子どもが対人関係を構築していったのかという経過を考慮して検討した。

結果：本研究の結果、多くの民族的背景のあるアメリカの文化で幼児期を過ごしてきた子どものほうが、他者に対する積極性が高い傾向がみられた。文化的背景が異なる子ども同士の間ではコミュニケーションの際に、何を伝達しようとしているのかということも補足するための調整として、表情や態度で伝達内容を示し、スムーズにコミュニケーションが促進されている。幼児の場合には、1つのジェスチャーが文化によって多様な意味になるということにとらわれずに、子ども同士でノンバーバル行動を通して、理解が促進されている。さらに、言語発達のみが適応の条件になるとは限らないことが示唆された。すなわち、言葉によるコミュニケーションが円滑に行われなくても、対人関係の構築が可能であることが示唆された。異文化で育った幼児の園環境へのスムーズな適応のためには、子ども自身の自己が受け入れられ、これまでの異文化での経験が生かされていくために、言語に頼った異文化適応スキルだけではなく、非言語的な異文化コミュニケーション・スキルの育成も有効であることが示唆された。